

[報告] 埼玉県春日部市郷土資料館に残る 1923 年関東地震に関する記録

～大震災記念児童文集と大正 12 年粕壁町震災写真帳～

栄東中学・高等学校* 荒井 賢一・小林 優介・竹原 輝・高木 駿・山浦 照良・安倍 聡志・北廣 創史

The records of the 1923 Kanto Earthquake in the Kasukabe History Museum, Saitama Prefecture
— The memorial collection of composition by children and the earthquake disaster photo album —

Ken'ichi ARAI, Yusuke KOBAYASHI, Aki TAKEHARA, Shun TAKAGI, Tera YAMAURA, Satoshi ABE and Soushi KITAHIRO

Sakae Higashi Junior and Senior High School, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City, Saitama, 337-0054, Japan

We surveyed the records of the 1923 Kanto Earthquake in the Kasukabe History Museum, Saitama Prefecture. We read the memorial collections of composition consisting written by students of the Kasukabe Elementary School suffered from the earthquake and the earthquake disaster photo album of the old Kasukabe Town. From the four collections we could read the detail situation of collapse of the house, occurrence of the aftershocks, fire occurred in the Tokyo area, and irresponsible rumors.

Keywords: Kasukabe History Museum, 1923 Kanto Earthquake, Memorial Collection of Composition by students, Earthquake Photo Album.

§ 1. はじめに

1923(大正 12)年 9 月 1 日に発生した関東地震は、埼玉県内にも 316 人が犠牲となる大きな被害をもたらした。埼玉県内の三大被災地の 1 つと言われている旧粕壁町(現 春日部市の中心部に位置する)では、諸井・武村(2002)および諸井・武村(2004)によると、1211 戸のうち 209 戸が全壊して 12 人が犠牲となった。荒井・他(2017)は、春日部市内に建つ関東地震に関する石碑 11 基の調査をおこなった。その過程で、春日部市郷土資料館に、当時の粕壁尋常小学校の児童たちが体験した震災を作文にした「大震災記念児童文集」と、旧粕壁町内の被害の様子を写した「大正 12 年粕壁町震災写真帳」が残されていることを知った。いずれも、現物を調査(接写)させて頂くことができた。

§ 2. 大震災記念児童文集

「大震災記念児童文集」は、1923 年の 10 月に、当時の粕壁尋常小学校(現在の春日部市立粕壁小学校)に在籍していた児童たちが書いたものである。地震の発生時の様子から復旧を進めていく過程に至るまで、児童たちが見聞きしたことや感じたことが、詳細に記されているものが多い。文集は 4 冊に編集されており、本稿ではその中から、

地震当日から発生して数日後までの春日部市内や東京方面の様子が比較的詳しく書かれた 1 名の作文を記述する。なるべく作文に書かれていた文字のとおり再現し、必要に応じて現代仮名使いを()内に記す。また、旧漢字を常用漢字に直している箇所がある。

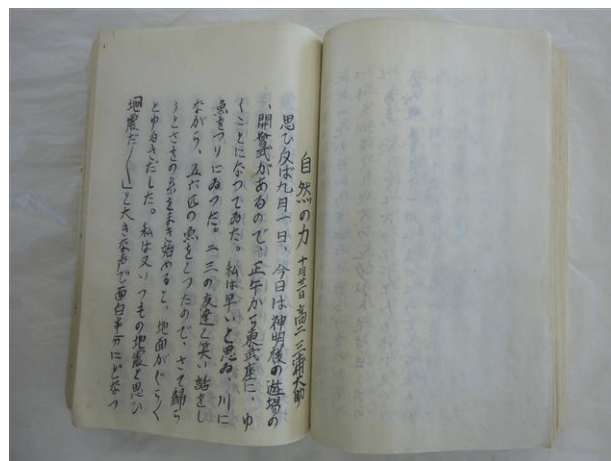


図 1. 大震災記念児童文集に綴られている作文
Fig.1 The memorial essay about the earthquake disaster written by students.

* 〒337-0054 埼玉県さいたま市見沼区砂町 2-77

電子メール : rikaken_sh @ yahoo.co.jp

思ひ反ば（返せば）九月一日、今日は神明様の遊場の、開會式があるので、正午から東武座に、ゆくことになつてみた。私は早いと思ひ、川に魚をつりにみつた。二三の友達と笑い話をしながら、五六匹の魚をとつたので、さて帰らうとさを（竿）の糸をまき始めると、地面がぐら／＼とゆるきだした。私は又いつもの地震と思ひ「地震だ／＼」と大きな声で面白半分になつた。と、其のしゅん間どど／＼／＼と音がしたと思ふとぐらぐらと大ゆれにゆれだした。私は始めて驚ろいて、すばやくかきねにかじりついた。橋の上にながそりんぼんぶを見てみた人々が、一時にどつと、なだれをうつつて左右に逃げた。川の波は一尺五寸位高くあがり家はつぶれて、ほこりは一ぱい川にこめ立てて、向う河岸は、ぼんやりしか見へない。大地震は五分位で止まつたが、後からつづい起る余震に家にかへる勇氣もない。少し地震がやんできた。つりにき（来）る時に通つてきた道を通らふとしたが、ほこりが一ぱいで通れそうもない、しかたがないので横町の方をとほつて帰らうとかけだした。表通にでて見ると人で一ぱいである。永島の前にきたら、消防隊が一生懸命瓦をはがしてみた。なにしてみると聞いたらおじいさんがつぶされた。急に家が心配になつてきた。いそいで家に来て見たら、店は大丈夫であつたが母屋は目茶／＼だ。家の者は一人もみない。驚ろいて「お父さん／＼／＼」とよんで見たら、うらの方で返事がした。うれしさの余り、さをも、ばけつも、なげだしておそろしいのもわすれて、屋根をかけね（ぬ）けて、うらにいつた（行つた）。父は「あぶない」と注意した。一同はうらのいも畠に逃げた。まだ余震が度々ある。一処（緒）に逃げた近処のおばあさんなどが「なむあみだぶ」と地震がくる度にとなへてゐる。いつのまにか太陽が西の方へと落ちてゆく。母は「なにかたべなくては」と心配して、梨やせんべいを買つてくれたが、ちつともたべたかない。母が「東京はどうだらう」と心配した。兄が「東京はたしかに軽い」と力んだ。日はくれたがなんにも出せない。皆んな逃げだしたままにこの夜は通さねばならない。めしはもちつ（ろ）んたけなかつたが、二軒でたきだしをもらつたので、近処へもくれたほどであつた。夜は店のゑんだいにみた。外の内でも皆んな表に

おきてみた。草木も眠る丑三の二時頃もちつとも深んとしてみない。むしろ、にぎやかであつた。東京からくる人々が話す話は一として我等を驚かさないものはない。停車場へいつて東京の空を見て驚いた。十里もはなれた所で、黒煙の上ののが見える。母はうつむいて空を見るのもいやがつた。一日の夜もだん／＼明るくなつてきた。私は、ねむたくて知らず／＼ゑんだいの上にねこんでしまつた。いつの間にか夜は明けて眼をさました時は、全つたく明るくなつてみた。東京の親類、奉公してゐる子や兄弟の身を安（案）じながら自転車で尋にゆく人がたくさんあつた。東京から逃て来た人は着の身着のまゝの方が多かつた。中には死んだ小（子）供をせおうてゆく人もあつた。今は自分の全財産ともなるべき、ふろしき包をせおい、なれぬたびに、足を引づりながら行くすがたも、いた／＼しい限りである。逃げてくる人も尋ねにゆく人も昼夜の着（差）別無く通つた。二日の日も無為に過ぎた。三日頃は鮮人でさわいた（だ）。東京では鮮人がばくだんをなげたり、短刀やピストルで人をきつたりうつたりするといふ事を逃げて来た人が話した。三日頃より瓦をかたし始め四日目にはふとん等全部でた。九月一日以来始めてふとんの上におねることができた。今思ひ反（返）せば實に自然の力は恐しいものである。ほんの一寸の間に、東京をあれほどの大火にしてしまつた。貧しいも、とめるも平等になつた。幸福も破られてしまつた。この大震災で、世の人は自然の力の大きなるに深く感じたであらう。

東武座は旧粕壁町内にあつた劇場で、震災の前から児童はこの付近に住んでいたと考えられる。地震（本震）による揺れの記述から、初期微動が数秒続いてから主要動に見舞われ、揺れている時間はかなり長く感じられたようである。本震のすぐ後から余震が続発し、その状態が夕方にかけて続いた様子が伺える。春日部市は、地震後に大火災が起きた現在の東京都墨田区や台東区から25km程北に位置する。この作文からも火災の凄さが伝わってくる。流言蜚語による混乱も、児童の心に強く印象づけられた。

4冊の文集の中から、9名の作文を掲載した記念誌『大震災記念児童文集』が、2014（平成26）年に発刊されている（春日部市立粕壁小学校2014）。2011年東北地方太平洋沖地震の発生から3年を迎えるにあたって、児童の安全をいかに守るかを考える貴重な資料として編集されたものである。

§3. 大正12年粕壁町震災写真帳

「大正12年粕壁町震災写真帳」は、地震による建物の倒壊や道路の被害を記録した24枚から成る貴重な写真資料である。本稿ではその中から1枚(図2-1)を掲載する。なお、一部の写真は、春日部市郷土資料館のホームページで紹介されている。

図2-1の写真は、現在の春日部大通りの震災当時の様子で、図2-2の☆印の付近で撮影されたものである。道路の両側に建っていた多くの家屋が全壊している様子が生々しく写されている。前述の作文に書かれた「家がつぶれてほこりがたちこめている様子」と対応する。図2-3は、図2-1の写真と同じ場所で2016年3月に撮影をした風景である。



図2-1. 震災写真帳の写真「上町表通り」
Fig.2-1 The photo of earthquake disaster “Kamimachi Omote-Douri avenue”.

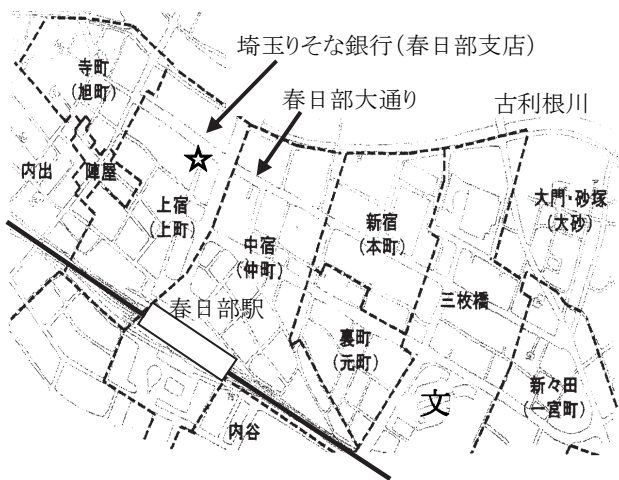


図2-2. 春日部駅周辺の地図(粕壁宿地割図(春日部市郷土資料館)に加筆)
Fig.2-2 Map around the Kasukabe Station.



図2-3. 上町表通り(図2-1)の現在の風景
Fig.2-3 The photo of present “Kamimachi Omote-Douri avenue”.

図2-2の中で「文」と記されている学校は、春日部市立粕壁小学校である。震災写真帳には、当時の粕壁尋常小学校の校舎が大破した写真も含まれている。以上の各記録から、旧粕壁町が埼玉県内の三大被災地の1つであったことが十分に理解できる。

§4. おわりに

本稿では、春日部市郷土資料館に収蔵されている大震災記念児童文集と大正12年粕壁町震災写真帳を紹介した。各児童が書いた作文すべてを閲覧したところ、比較的自由的な表現(子どもらしい言葉)が使われており、単純な誤字や脱字が多い。また、児童の自筆で書かれている。それぞれの作文からは、地震や震災を真正面から冷静になって受けとめている姿を想像できる。現在、春日部市内を歩いてみても、図2-3の写真のように近代化した建物が並び、震災当時の面影を現地で見ることができない。だからこそ、本稿で紹介したような記録を大切に保存すると同時に、後世にも引き継ぐ必要性を感じる。

神田・武村(2016)は、埼玉県南東部での大きな揺れについて、「本震から3分後(1923年9月1日12時01分)に発生した東京湾北部を震源とするマグニチュード7.2の余震」による可能性を指摘している。児童文集の中で、複数の児童が「地震がやんだから立ちどいたらまた揺れだした」というような記述をしている。この余震と春日部市内での揺れとの関係性を調べるため、今後は児童が書いた作文1つ1つをさらに詳しく分析したい。

謝辞

春日部市郷土資料館学芸員の榎本博氏には、児童文集の文字の読み取りや、震災写真帳に載っている写真の撮影地の推定などに関してご指導を頂いた。栄東中学・高等学校の篠田海遥氏・鈴木隆仁氏・野間鉄心氏には、児童文集の閲覧調査や調査結果の分析に協力を頂いた。また、同校の滝澤怜於氏をはじめ理科研究部の生徒に、本稿の校正に協力を頂いた。本研究は、武田科学振興財団より頂いた研究助成(高等学校理科教育振興奨励)により実施をした。

対象地震:1923 年関東地震

文献

- 荒井賢一・小林優介・竹原輝・高木駿・山浦照良・安倍聡志・北廣創史, 2017, 埼玉県春日部市に残る 1923 年関東地震に関する石碑, 歴史地震第 32 号, 77-86.
- 神田克久・武村雅之, 2016, 1923 年大正関東地震の震度分布に対する本震直後の M7 クラスの余震の影響, 日本地震学会 2016 年度秋季大会予稿集, S15-17.
- 春日部市立粕壁小学校, 2014, 大震災記念児童文集, 24pp.
- 諸井孝文・武村雅之, 2002, 関東地震(1923 年 9 月 1 日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定, 日本地震工学会論文集, 第 2 巻, 第 3 号, 35-71.
- 諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923 年 9 月 1 日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 第 4 巻, 第 4 号, 21-45.